

## 私と博物館 — 博物館を利用する立場から —

矢島道子

東京医科歯科大学

## Natural History Museum — My experience, opportunities and challenges for the future —

Michiko Yajima

Tokyo Medical and Dental University, 2-8-30, Kounodai, Ichikawa-shi, Chiba-ken 272-0827 (pxi02070@nify.com)

## 裏口から始まって

「ひとは誰でも一生の間に3回は動物園に行く」といわれることがある。自分自身が子どもの頃、親になって子どもを連れて、そして孫を連れて動物園へ行くという。残念ながら、まだ「博物館は3度行く」といわれていない。博物館を利用する機会が比較的多い古生物学者が、どういうきっかけで博物館に行くようになったかを分析することは、博物館と人々を繋ぐ道を探るひとつの方法かもしれない。

私の場合、大学3年になって地質学教室に進学するまで、博物館を利用した記憶がない。まず、郷里には博物館がなかった。次に、昆虫採集は男の子がやるものと思っていた。今の世の中で、こんな事をいったら大変なことになるが、私が子どもの頃は昆虫採集も、木工細工も、ラジオの組立も、電気修理も男の子がやるものと思っていた。だから東京に上京する機会があっても博物館には行かず、もっぱら美術館を巡った。

大学3年の時に、鉱物学教室のスタッフから、国立科学博物館の鉱物部門でアルバイトがあるから行かないかと声がかかった。おかげで最初に博物館に行ったのは展示を見るのではなく、資料庫の中でのラベル整理であった。次は1975年に日本古生物学会の総会が国立科学博物館本館で開かれた時に、学会参加のために博物館を訪れた。しかし、この時も展示は見えていない。

私の博物館体験の歴史はすべて裏口から資料庫中心で始まった。ずいぶん経ってから、理科教員の旅行で、千葉県立中央博物館の標本庫を見学させてもらったことがあった。ふつうの教員にはこのような機会はあまりなく、大変好評であった。教員だけでなく、誰でもバックヤードには興味があるかもしれない。

## 大学博物館？

化石貝形虫の分類学的研究をするようになってから、恩師である花井哲郎先生の指導はほとんど大学の総合研究資料館（現東京大学研究総合博物館）で行われた。資料館に走査型電子顕微鏡があったことが主な原因であるが、博

物館で研究することは当たり前のこととして教育された。「この資料館の名前に研究という言葉がついているのが重要なんだよ。単なる物置じゃないんだよ。日本では大学博物館が必要だという意識がないので、妥協して資料を置くところとして始めるしかなかったんだよ。だから英語では University Museum とつけたのだよ」とお教えいただいたことがとても印象的であった。

大学を卒業した後、欧米の大学博物館を見学する機会を得て、なるほど大学博物館は実物を使った大学教育のためにも必要なのだと思った。欧米では、実物すなわち博物館の歴史は古いものだと実感した。

## 研究と展示は連続して

化石貝形虫の分類学者として研究のスタートを切り、日本の貝形虫のタイプ標本を訪ねて国外の博物館巡りをするようになった。

ロンドンの自然史博物館に最初に行ったのは1988年まで大英博物館自然史部門といわれていた。貝形虫標本室は1階にあった。ちょうど「ヒトの性」の展示が行われていて、標本室のドアを開けて外に出ると、目の前に大きなヒトの性器の展示があったのは、強烈な印象であった。展示と研究が隣接するとはこういうことかと思った。

スミソニアン自然史博物館、カンザス大学自然史博物館、ゼンケンベルク自然史博物館等々貝形虫標本の調査に伴いながら、一般展示を見るようになっていった。カンザス大学自然史博物館では大学博物館であるにも係わらず、小さな子どもたちがたくさん見学しており、また展示も工夫してあったのには感心した。

そったく  
碎啄の機

大学院終了後、1981年に高校教師となった。学習指導要領が物理・化学・生物・地学必修から理科I必修に変わった時代であった。子どもたちの博物館体験は、初等・中等教育システムにのって始まる。私は、同僚の生物教師の協力を得て、博物館見学を夏休みの宿題にすることにした。課題（現在はワークシートと呼ばれていることが多い）

を作るために、初めて国立科学博物館の展示をまじまじと見るようになった。数名の生徒を引率して、説明すると、生徒たちは楽しそうに課題をこなしている。しかし、夏休みの宿題となると、生徒たちは面白くなさそうであった。校外学習、あるいは最近の総合学習で博物館を利用することも多かった。しかし、生徒たちが見学場所を見つけ出したのでなく、教師が与えたものだと、生徒の関心はいまいちということになる。

「<sup>そつたく</sup>啐啄の機」という言葉がある。これは禅宗の言葉らしいが、教育に関わっているものにとって、教育の極意だと思う。鳥が卵から<sup>かえ</sup>孵るとき、雛は外へ出ようとして中側からちよんちよんと叩く。それを親鳥は素早く悟って、タイミング良く外側からこんこんと叩いて雛が外へ出るのを助けるという意味である。親が外から叩くのが早過ぎれば、中にいる鳥はまだ孵っていないで死んでしまう。逆に、親が叩くのが遅過ぎれば、子どもの力だけで殻から出られず、これも死んでしまう。雛鳥が外へ出たい、何かしたいという時に、ちょうど良い時期に、ちょうど良いものを親なり教育者が与えることができると、教育は素晴らしいものになる。そういうことを教育は目指したいけれど、現実的にはほとんど不可能である。それだけでなく、子どもたちが全然希望していないことをやらせてしまうことが多い。

日本からも恐竜化石が産出して、恐竜の人気は圧倒的に高い。夏休みには日本のどこかで必ず大きな恐竜展が行われている。入場料がかなり高価でも、あるいは高価であるほど入場者は多い。ただし、恐竜に出会うのには子どもの発達段階で一番良い時になされる必要もある。私は試みに小学生と幼稚園児と2歳の子どもの目に恐竜を見せたことがあった。幼稚園児は言葉も発せないほど興奮していたが、小学生は既に自分の持っている恐竜の知識をひけらかすだけだったし、2歳の子どもは怖いと泣き出すだけであった。

### 化石は手で触って

最近の博物館は普及行事としていろいろなワークショップを行っているので、参加者は実際に手を動かして何かを作り、おみやげとして持ち帰って自分のものにできる機会が多い。これは効果的である。

高校の授業では、アンモナイトや魚の化石標本を教室で回して、全部の生徒に触らせた。ちょうど時代が悪く「校内暴力」という言葉に代表されるような大変乱暴な生徒を教えた。標本に触らせるというのは非常に怖かったが、実際にモノ（実物標本）に触る喜びを生徒に味わわせなかった。幸いに、一回も標本を壊されることはなかったし、標本がなくなることもなかった。

今、東京医科歯科大学の学生に科学史を教えている。いろいろな話をしているうちに、化石など触ったことがないということがわかって、科学史の時間に化石の話をしたり、

化石標本に触らせたりしている。生まれて初めてアンモナイトに触ったとか、恐竜の骨の破片には飛び上がるほどびっくりしたとか、反応は様々である。博物館を訪れたことのある学生でも、実際にモノに触るということはほとんどない。標本というのはガラスケースの中にあるものだという意識がある。素晴らしい標本ではなくても、化石のかけらでも実際に触ると、それはやはり喜びになる。非常に大変だとは思いますが、博物館でも、ガラスケースの中の展示だけでなく、モノに触れることができるような工夫もした方が効果的だと思う。

### 子育てと博物館、シルバーと博物館

今、子育て支援センターの人々と協力して、海の生物や化石を子どもたちに体験学習させている。この時に強く感じるのは親の存在である。親の子育ての不安を取り除く必要がある。親と一緒に体験学習させた方がいい。「恐竜の下でお泊まり学習」などは、どんなものだろうか（東海大学自然史博物館や群馬県立自然史博物館で実施された）。

子どもを相手に面白くやるには、やはり子どものことをよく知っているカウンセラーたちと良く連携して行う必要がある。また、2007年には団塊の世代が定年を迎えた。彼らを活用することは自然史系博物館にとって大きなメリットになるだろう。これは博物館ボランティアの形で少しずつ取り入れられているようである。

### 博物館にアーカイブス

私は国際地質科学連合（IUGS）内にある国際地質学史委員会（INHIGEO）の日本委員の一人である。INHIGEOの国際シンポジウムは毎年開かれ、その巡検では自然史博物館を訪れることが多い。自然史博物館のアーカイブスを見学するのである。

欧米では自然史博物館は400年以上の歴史をもち、都市の中央に位置し、標本は膨大である。博物館を縮小しようという攻勢は欧米でもあるが、もともと持っている底力が違う。西欧の自然史のとりくみの違いをまざまざと見せつけられる思いである。今、日本には自然史系博物館を縮小しようという動きがある。ようやく根付き始めた自然史がまた無に帰す可能性がある。

私は博物館関係者ではない。しかし、博物館に呼びかけて、お雇い外国人教師フランツ・ヒルゲンドルフの展覧会をやってしまったことがある。4つの自然史博物館をまわる巡回展であった。この機会をとおして、展示企画の意志決定や財政の問題をはじめ、展覧会を開催する際の博物館の内側の諸課題について素人が知ることとなった。その後、自然史系のいくつかの博物館がまとまって、巡回展をやるケースが増えているようである。嬉しいことである。

ヒルゲンドルフの展覧会も、フンボルト大学自然史博物館にいろいろな文書や写真などが全部残っていたため企

画することができた。自然史博物館にアーカイブスをつくるということを考えてほしい。日本では、横浜の開港記念館や文京区本郷の鷗外記念館とか、いわゆる文科系博物館ではアーカイブスが考えられているところもあるが、自然史博物館にアーカイブスはほとんどない。

## 博物館で音楽会、美術展、展示の中でシンポジウム

名古屋大学博物館の足立守さんがミュージセラピー (Muse therapy) いうことを提唱されている。ミジンコの好きなジャズプレイヤーの坂田明さんは、お呼びがかかったら、博物館でジャズをいくらでもやりたいと言っている。考えればいろいろなことができるのではないだろうか。

博物館で美術展というのも考えられる。それも、博物館の展示物の間に美術品を置くのである。つまり自然のものと人間の描いた絵とか彫刻を混ぜて展覧会をやったら面白いのではないだろうか。これはミュンヘン大学の自然史博物館で実際にやったということを知っている。

2006年のINHIGEOのシンポジウムはリトアニアのヴィルニウスの民族博物館で開催された。博物館の会議室を借りたのではなく、展示物の間の空間に椅子を並べてシンポジウムを行ったのである。民族誌の展示物の間での16、17世紀の地学史の講演などはとても趣が込められていた。

博物館はどうあるべきかを考えるときに、それぞれの古生物学者が好きな博物館はどんなものかをアンケートすることも重要だと思う。小さくて、おどろおどろしくなく、きれいな写真など何も並んでいなくても、良い博物館もある。好きな博物館というのはどんなものなのか、それがどうして楽しいのかということを知るのも大切である。

## まとめ

博物館について感じることを私のいろいろな立場から列挙した。もちろん古生物学者なら誰でも知っていることもあるが、博物館関係者ではないことを強調して列記してみた。今後の博物館の活動に少しでもプラスになれば幸いである。

## 付記・創造説

2007年のINHIGEO (国際地質学史委員会)の集会は、7月27日から8月5日までドイツのアイヒシュテットで開催された。テーマは「地質学と宗教の歴史的關係」ということで、4日間にわたり70件ばかりの講演があった。いささか驚いたことには、アメリカのみならず、オーストラリア、ドイツ、イギリス、そしてイスラム諸国などでも、キリスト教保守派 (原理主義) が中心になって創造説に基づいた「科学」教育や博物館の展示を実施しており、近年その傾向が強まっていることが危惧されるという講演がその1日を費やして話された。その原因として、初等教育で地学がほとんど授業されていないこと、博物館の予算が小さくなっていること、ポピュラーサイエンスの面で原理主義の方が上手であること、原理主義の方が経済的に豊かで、その経済力をもとに新しい学校は原理主義に占められてしまうことがあげられた。びっくりして質問すると、「ほんの5年前のことだった。ID (intelligent design) などアメリカの話だと思っていたら、あれよあれよという間のできごとだった。日本がそうならないことを心から希望するよ」と脅された。少し心配になって、ここに付記する。数年後に一笑されることを心から祈る。

